

## 日本語らしい表現を検証する方法の提案： 日本語母語話者と学習者の移動事象記述の比較より

吉成 祐子  
岐阜大学

### 要 旨

本研究は、移動事象を描写する実験結果をもとに日本語母語話者（JL1）と学習者（JL2）の言語表現の特徴の違いを分析することによって、移動事象を描写する際の「日本語らしい表現」とは何かを検討するものである。日本語の移動表現は「話し手に近づく／話し手から遠ざかる」というダイクシス（直示）の表出に特徴があると言われており（Koga et.al. 2008、松本 to appear）、本実験の対象である JL1 そして中級レベルの JL2 でも、使用傾向としてダイクシスの表出頻度が高いことが確認された。しかし、表出の仕方に違いがみられた。このような、誤用ではない使用傾向の差を検証することにより、日本語らしい表現とはどのようなものかを明らかにする手法の一つを提案する。

### 1. はじめに

日本語学習者にとって習得上困難を感じる点は人によって様々であろうが、一般的に、母語にはない言語特徴を習得するのは難しいようである。例えば非漢字圏学習者の漢字習得、膠着語ではない母語を持つ学習者の格助詞使用などがあげられる。しかし実際の誤用を観察すると、母語に関わりなく学習者に共通の誤用傾向が見られたり、困難さを感じていなくても間違いが多いものがあったりする。また文法的に誤用ではないが、日本語母語話者であれば言わないような表現も見受けられる。

無自覚でも誤用であれば訂正の指導もできるが、「文法的に間違いはないが、日本語としてなにか違和感がある表現」は、それを規定すること自体が難しく、日本語学習者には確認することも習得することも難しいもの

となっている。いわゆる「日本語らしい表現」とはどのようなものなのだろうか、またどうすれば習得できるのだろうか。このような問題を日本語教育の現場で考え、指導する機会や余裕はなかなかない。

本研究では、日本語らしい表現とは何かを明らかにする手法の一つとして、言語産出実験によって得られたデータを用いた対照分析を提案する。日本語母語話者と学習者の表現がどのように違うのかを、誤用ではなく、使用頻度をもととする言語使用の傾向に注目して比較分析する。そこで見られる違いにこそ、日本語母語話者が自然に身につけている日本語らしい表現が現れていると考えられるからだ。ある事象を描写する際、様々な表現が可能であり、唯一の正しい表現というものはない。しかし、様々な表現の中でも用いられやすい表現というものがあり、そこには何らかの母語話者共通の認識があって使用されていると考えられる。それが学習者にも見られるかどうかを検証することが必要である。

分析には移動物そのものが移動する「主体移動」の事象を描写する際の言語表現を取り上げ、日本語母語話者と学習者の表現を比較し、その特徴を明らかにする。繰り返しになるが、重要なのは学習者の誤用を指摘するのではなく、日本語母語話者の表現との使用傾向の差を検証し、それはなぜなのかを考察することである。

## 2. 先行研究

### 2.1. 日本語らしい表現

日本語を母語としない学習者が日本語を習得する過程で産み出す言語表現は、日本語教育や第二言語習得研究分野の研究対象として検証や分析が行われてきた（野田他 2001、お茶の水女子大学日本言語文化学会 2002、畑佐他 2012 等）。重大な関心事として、学習者の誤用や習得の過程（習得順序）、習得に関わる要因などが取り上げられてきた。特に誤用分析が盛んに行われ、音声・音韻、語彙、文法、言語運用など対象も幅広い。

誤用の実態だけでなくそれを引き起こす要因も検証され、母語の転移の可能性 (Inagaki 2001、張 2001) や、母語に関わりなく学習者特有の言語特徴を表す「中間言語」の存在も明らかにされてきた (迫田 1998、戸田 2003)。

教育の現場では学習者の間違いが目立つからだろうか、日本語教育では誤用研究に注目が集まっているが、日常生活においては、間違いとは言えないものの、なにか違和感のある表現も多い。その違和感にも程度の差があり、ポライトネスとの関連でわかりやすいものもあれば、コミュニケーション上問題がないために見過ごされるようなものもある。例えば、相手の荷物を持つことを申し出る表現として「荷物を持ってあげましょうか」がある。これは文法的に間違いではないが、表現上に恩恵を表すことは待遇表現として適当でないことから、不適切であると考えられる (坂本・蒲谷 1995)。また、相手の願望を尋ねる「このペンを使いたいですか」のような表現も、日本語では直接相手の願望を聞くことが失礼にあたるため、適切とはいえない表現となっている (鈴木 1997)。

違和感のある表現が丁寧さに関わる場合は、その理由とともに見いだされやすいが、荻原 (2010) が指摘している、接続助詞「から」「ので」の使い分けのようなものは、日本語母語話者も特に意識しているわけではないようである。このような自然に身につけている言語表現の使用規則を探ることは難しい。母語話者でも使用基準の判断を自覚していない言語表現の使い分けは多々あると思われるが、この点に注目し、分析を行っている研究はまだまだ少なく、方法論も確立されていない。日本語らしさを計る尺度的研究も見当たらない。教育工学の分野では、確率的言語モデルを用いて日本語学習者の作文に対して日本語らしさと感想文としての良さを評価する指標を得ているもの (高他 2001) もあるが、作文全体を評価しており、言語表現そのものの日本語らしさを検証するものではない。

特定場面での言語表現についての研究は語用論の分野に多く、依頼や謝罪などの場面を設定し、談話を完成させるテストや実験手法を用いて様々な言語表現の多様性を明らかにしている。日本語の表現に関する研究をあげれば、依頼表現（柏崎 1993、岡本 2000）、申し出表現（吉成 2007）、謝罪表現（熊取谷 1993）などがあげられるが、どれも日本語母語話者が用いる言語表現の多様性を指摘するものであり、日本語学習者の言語表現と比較したものはあまりない。小池（2000）は依頼場面のロールプレイから得られた日本語母語話者と学習者の発話を比較し、母語話者が失礼と感じる印象を分析しているが、終助詞「ね」の多用や、用件を突然切り出す談話展開といった、発話全体から見た語用論的な評価を中心にまとめており、言語形式そのものの日本語らしさを分析しているものではない。近藤・姫野・足立（2009）は認知言語学の観点から、言語形式そのものを対象として「好まれる言い回し」に注目しているが、ここでの分析基準は母語話者と学習者の文章に対する適切性判断で、自然に産出される日本語らしさを検証するものとなっていない。

以上のように、日本語らしさに関わる先行研究には方法論が確立していないことや、学習者の発話から日本語らしさの逸脱を見ている研究でも語用論的な面からの分析がほとんどであることなどに問題がある。また言語表現の使用基準を明らかにしようとしている研究では、言語形式に対する母語話者の印象評定のような評価をもとにしているものがほとんどであり、母語話者が意識することなく用いている言語表現の実際を反映した分析になっているとは言えないだろう。母語話者が自然に身につけ使用している言語表現は、産出された言語表現そのものを対象に分析すべきである。

## 2.2 日本語の移動表現

本研究が取り上げる「主体移動」とは、「走る、飛ぶ、入る、降りる」などの移動動詞を用いて表現される移動事象のことである。移動事象には、

移動物 (Figure)、移動の経路 (Path)、移動に関わる参照物 (Ground)、移動の様態 (Manner) など様々な意味要素が関わっている。例えば、一人の男性が走って部屋の中に入るといふ移動の様子を言語化している日本語の例 (1) を見ると、移動物は「彼」、移動に関わる参照物は「部屋」、移動の様態は「走る (駆け足)」、移動の経路は「入る」となっている。同様の場面を言語化した英語の例 (2) を見るとわかるように、表される意味要素は同じでも、どのような言語形式が用いられるのかは言語によって異なる。(1) と (2) を比較すると、移動の経路 (Path) は日本語では主動詞、英語では前置詞で表され、移動の様態 (Manner) は日本語では副詞、英語では主動詞が用いられている。

(1) 彼は 駆け足で 部屋に 入った。  
 Figure Manner Ground Path

(2) He ran into the room.  
 Figure Manner Path Ground

移動表現の分析において重要なのは、文の中心となる主動詞ではどのような概念が表されているかである。主動詞は下線で示しているが、日本語では (1) のように経路概念が、英語では (2) のように様態が主動詞で表されることが多い。類型論の分野では、主動詞でどの概念が表されるかで言語が分類され、特に経路 (Talmy1985, 2000) や、様態 (Slobin 1996, 2000) に注目した議論がなされてきた。しかし、日本語の場合、(3) のように主動詞の位置にダイクシス (Deixis) が表されることが多いという特徴を持っている<sup>(1)</sup>。

(3) 彼は 部屋に 走って 入って いった。  
 Figure Ground Manner Path Deixis

ダイクシスとは直示的な方向のことで、「話し手に近づく／話し手から遠ざかる」という話し手の位置との関係を表す経路概念の一つと考えられてきた (Talmy 1985, 2000)。しかし松本 (to appear) は、様々な言語を取り上げて、非直示的な経路 (上下や内外の方向など) に比べると、ダイクシスは特別なふるまいをすることを指摘している<sup>(2)</sup>。また Koga et al. (2008) では、日本語で書かれた小説とそれを翻訳した 3 言語 (英語、ドイツ語、ロシア語) における移動表現を比較し、日本語ではダイクシスの情報が頻出する特徴を明らかにした上で、ダイクシスを非直示的な経路概念と分けて分析することを提案している。

日本語はダイクシスを表す特徴を持っているが、それを表す手段、つまり言語形式は特別なものではなく、他の多くの言語にも存在する「行く／来る」のような動詞で表される。「行く」は出発点が話し手の領域、「来る」は到達点が話し手の領域となっている。厳密な概念の違いはあるものの、このような移動の動作を二つの動詞で言い分けている言語は多く、英語の 'go/come' や、中国語の「去／来」、イタリア語の 'andare/venire' などがあげられる。

ただし、日本語におけるダイクシスの表示方法は、「行く／来る」のような単独主動詞を用いるだけでなく、「歩いていく」「降りてくる」のような、「ていく／てくる」という補助動詞を用いた複雑述語の形式でも表される<sup>(3)</sup>。この補助動詞の使用方法は実質的な空間移動の方向性を示すものだけでなく、特定の時点を基準とした時間的推移や出来事の展開の捉え方を表すものもある (庵他 2000) が、本研究では実際の移動に伴う「ていく／てくる」の補助動詞の使用だけを扱っている。他言語ではこのような動詞の組み合わせでダイクシスを表す手段を持つものは少ないが、本実験参加者 (日本語学習者) の母語である中国語には存在する。例えば、「走去 (歩いていく)」「上来 (あがってくる)」のように「～去／～来」が日

本語の「ていく／てくる」と同様に表すことができ、用法的にも実質的な空間移動の場合はほぼ日本語と同じであると言われている（張 2001）<sup>(4)</sup>。

日本語にはダイクシスを表す言語形式として、二つの動詞の形（単独主動詞、補助動詞）があることを説明したが、その他の方法として、「私のほうに歩いた」「私（のところ）から離れた」のように、話し手（の領域）を明示し、着点句や起点句として表出することもできる。ただし、「私のほうに歩いてきた」「私から離れていった」のように、ダイクシスを表す補助動詞を伴う表現のほうがより自然で違和感がない。これはダイクシスを重複して表すことになるが、ダイクシスに関わらず、「部屋の中に入った」のように、中という方向を表す経路が二か所（「中に」「入る」）で表されることもある。このような移動概念を複数位置で表す現象は数多くの言語で見られる（Sinha & Kuteva 1995）。

以上、日本語におけるダイクシスを表す言語形式についてまとめたが、さらに日本語ではダイクシスが文の中心である主動詞の位置で表されるという特徴を強調しておきたい。単独主動詞はもちろんのこと、「歩いていく」「入っていく」のような複雑述語の場合も、右側主要部の法則にのっとり、最終動詞が主動詞と考えられるからだ。また前述の通り、「私のほうへ」「私のところから」のように着点句あるいは起点句という主要部以外でダイクシスが表されていても、補助動詞との共起の可能性は高い。そのため、ダイクシスが主動詞の位置で表されるという特徴が考えられる。

日本語学習者の移動表現でも、母語話者同様の特徴が見られるだろうか。様々なダイクシスの表現形式があるが、その表出方法は同じだろうか。あるプロジェクトの一環として行われた実験データを用いてこれを検証する。

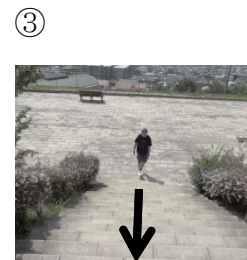
### 3. 調査方法と分析手順

本研究で分析するデータは、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実

験研究」(研究代表者：松本曜)で使用されているビデオ映像を用いて収集したものである。実際の調査では主体移動だけでなく、使役移動や視覚的移動も含め、様々な移動経路概念を考慮して作成された 52 場面のビデオ映像を提示し、口頭で事象を描写してもらった。発話を録音し文字化したものを一定の基準でコーディングしている。

関西圏及び中部圏の大学生 12 名(男性 4 名、女性 8 名、全員 20 歳代)を対象とした日本語母語話者データ (JL1) と、中部圏の大学で日本語を学んでいる外国人留学生を対象とした日本語学習者データ (JL2) を分析する。日本語学習者は、全員中国語話者であり、日本語能力試験 N2 に合格、あるいは同程度の実力を持つ中級レベルの学習者 10 名(男性 3 名、女性 7 名、全員 20 歳代)である<sup>(5)</sup>。

本研究が取り上げる主体移動のビデオ映像は、三つの様態 (Walk, Run, Skip)、三つの経路 (To, Into, Up)、三つのダイクシス (Toward S (Speaker), Away from S, Neutral) の要素を組み合わせた 27 場面で構成されている。移動の参照物 (Ground) として/TO/の場面では自転車、/INTO/では休憩所、/UP/では階段を設定している<sup>(6)</sup>。以下に、三つの要素を組み合わせた場面のビデオ映像画面と表現例、そしてコーディング結果を提示しておく。コーディングでは、文中で各移動事象概念(経路 Path、様態 Manner、ダイクシス Deixis) がそれぞれ何回表現されているかを数えている。移動事象の言語化において、文の中心となる主動詞ではどの概念が表出されているかが重要であるため、主動詞(下線部分)とそれ以外とで分析を行う。





## ① /RUN/×/INTO/×/AWAY FROM S/

(4) 友達が 駆け足で 休憩所-に 入って いった。  
 Manner1                      Path1   Path2   Deixis1

## ② /WALK/×/TO/×/NEUTRAL/

(5) 友達が 自転車のところ-まで 歩いている。  
 Path1                      Manner1

## ③ /SKIP/×/UP/×/TOWARD S/

(6) 男の人が スキップしながら 階段を のぼって きた。  
 Manner1                                      Path1                      Deixis1

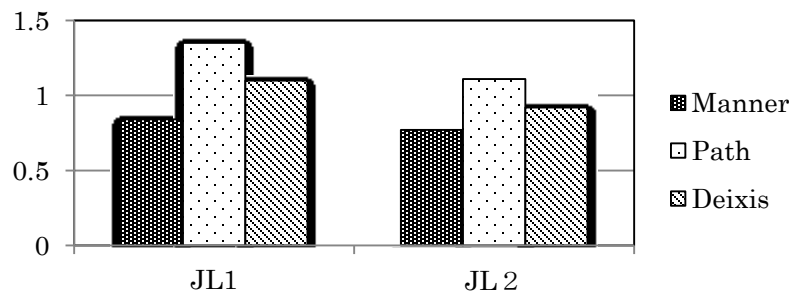
例えば (4) では、主動詞でダイクシス 1、それ以外で様態 1、経路 2 と数えられる。また、データの中には「駆け上がる」のような複合動詞も見られたが、主動詞は最終動詞である「上がる」(経路)としてコーディングしている。

## 4. 結果と考察

## 4.1 ダイクシスの表出頻度

図 1 は移動事象概念のそれぞれが、言語形式に関わらず 1 場面でのどのくらい表現されているのか、その平均値を示したものである。

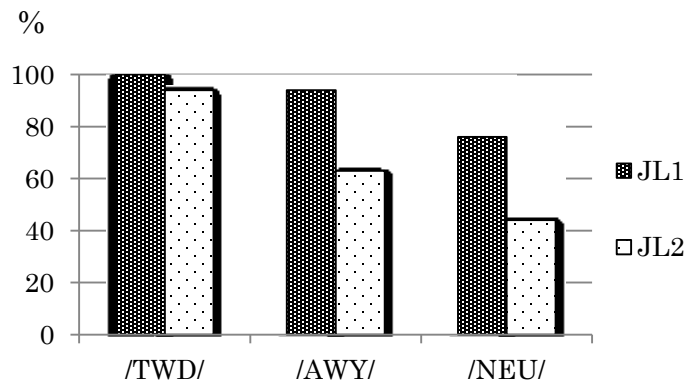
図 1 移動事象概念の 1 場面あたりの平均出現値



グループ間の特徴の差を見るために、カイ二乗検定を行ったところ、移動事象概念出現の傾向に JL1（日本語母語話者）と JL2（日本語学習者）との間に有為な差はなかった（ $\chi^2=1.059$ , n.s.）。つまり、日本語母語話者（Manner:0.84、Path:1.35、Deixis:1.10）、学習者（Manner:0.77、Path:1.11、Deixis:0.92）ともに、どの移動事象概念をどのくらい表出するのかは同じ傾向にあり、経路、ダイクシス、様態の順で表出頻度が高いことがわかる。

本研究が注目するダイクシスを見ると、日本語母語話者のほうが、平均値が高くなっている。3種類のダイクシスが設定されていたが、すべて JL1 の表出頻度が高いのだろうか、種類によって表出に差があるのだろうか。これを検証するために、話し手に近づく Toward S、話し手から遠ざかる Away from S、そしてそれ以外の Neutral を含む場面で、それぞれの概念がどのくらい言及されているのかを比較する（図 2）。どのような言語形式であろうと、また何か所で表出されていようと、文中でダイクシスが一つでも表されていれば 1 と数えて言及率を求めた。この言及率から、どれくらいダイクシス要素が無視されなかったかを見ることができる。

図 2 日本語母語話者と学習者のダイクシス言及率



グループ別に見ると、JL1 は/NEUTRAL/場面では言及率が下がるものの（76%）、/TOWARD S/は（100%）、/AWAY FROM S/は（94%）と、話し手の位置と関わる移動場面ではほぼ必ずダイクシスが言及されていることがわかる。/NEWTRAL/で言及率が低いとしたが、逆に言えば、話し手の領

域に関わりのない第三者的な立場で状況を見ている場面さえ、「友達が階段をのぼっていった」(/WALK/×/UP/×/NEUTRAL/) や「友人が休憩所の中にスキップしてきた」(/SKIP/×/INTO/×/NEUTRAL/) のように、ダイクシスを表す言語表現を用いて描写していることに驚く。

一方、JL2 の言及率を見ると、/TOWARD S/は 94%、/AWAY FROM S/は 63%、/NEUTRAL/は 44%と、順に低くなっている。しかし、両グループにおける三つのダイクシスの言及率傾向を知るためにカイ二乗検定を行ったところ、JL1 と JL2 との間に有為な差はなかった ( $\chi^2=4.578$ , n.s.)。JL1 ほどではないが、JL2 でも、話し手への移動、話し手からの移動が明らかな場面では、ダイクシスを表出する傾向があると言えるだろう。

以上二つの結果より、日本語母語話者と学習者のダイクシスの表出頻度をまとめると、日本語母語話者のほうが平均出現値でも言及率でも数値的には高いものの、経路や様態も含めた移動事象概念全体の表出傾向に差はなく、どちらかに特有の傾向があるわけではなかった。それはダイクシスの種類による言及率についても同様である。このことから、日本語学習者は移動事象概念の表出頻度という点で日本語らしさを見せていると言えるだろう。また、日本語学習者は日本語に特徴的だと言われているダイクシスの表出傾向を身につけているとも考えられる。これを裏づけるものとして、中国語母語話者 (15 名) の中国語での同実験結果を紹介しておきたい<sup>(7)</sup>。

図 1 の結果に相当する移動事象概念の 1 場面あたりの平均出現値は、中国語母語話者の中国語 (CL1) では、様態 1.13、経路 1.23、ダイクシス 0.68 となっている。中国語話者の日本語 (JL2) の結果と比較するためにカイ二乗検定を行ったところ、移動事象概念出現の傾向にグループ間で差があることがわかった ( $\chi^2=32.97$ ,  $p<.001$ )。さらに残差分析により、CL1 では有意に様態が多く (調整残差=4.422,  $p<.001$ )、JL2 ではダイクシスが多い (調整残差=5.193,  $p<.001$ ) ことが明らかになった。つまり、中国語

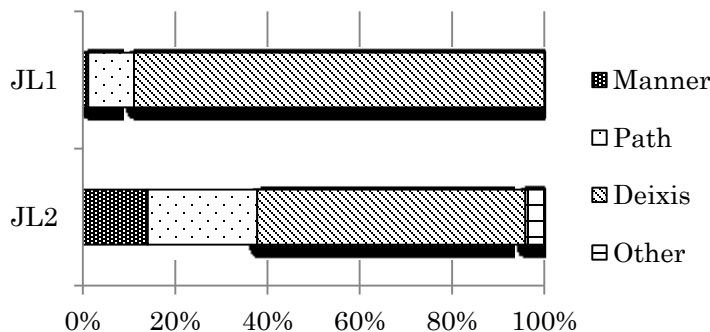
話者である日本語学習者の日本語は、母語の中国語よりも学習言語である日本語の表出傾向に近づいており、特にダイクシスが多いという結果は、移動表現における日本語らしさが身につけていることを表していると言えるだろう。

ここまでダイクシス表出頻度についての結果を見てきたが、次に、どのようにダイクシスを表出しているのか、どのような言語形式を用いて表現しているのかを見てみよう。

#### 4.2 ダイクシスの表出方法

日本語では主動詞でダイクシスを表出することが指摘されてきたが、実際に主動詞では他の移動概念と比べてどのくらい表出されるものなのか。また、日本語学習者には母語話者同様の傾向が見られるのだろうか。図3は主動詞の位置で各移動概念が表されている割合をまとめたものである。

図3 主動詞が表す移動事象概念の比率



JL1 の主動詞の特徴は、やはり圧倒的にダイクシスが表されていることである (88.9%)。JL2 でもダイクシスは 58.1%と、他の概念よりも表出の割合は高いが、経路 14.1%、様態 23.7%と、JL1 (経路 9.9%、様態 1.2%) に比べるとこれらの概念が表される割合が高いことが特徴となっている。このように、主動詞で表される移動概念の傾向は、JL1 と JL2 の間には違い

があり、日本語母語話者は典型的にダイクシスを主動詞で表すが、学習者はそうとは限らないということがわかる。

実際の学習者のデータを見てみると、「\*私にのぼった」「\*私の目の前に階段をあがった」のように、主動詞以外の方法でダイクシスを表すことが多い。またこのような表現は誤用を生むものになっている。一方、日本語母語話者にも「私のほうに」「私のところに」と、主動詞以外でダイクシスを表現する人が12名中3名いるものの、使用頻度は低く、また必ず「私のほうに歩いてきた」のように、主動詞でもダイクシスを表すという複数位置での表出となっていた。複数位置でのダイクシス表出は学習者にも見られたが、目立つのは、「私の前に来た」「\*私へ来た」のように、単独主動詞との組み合わせで表現されていることである。このような表現の使用は日本語母語話者には見られなかった。

ダイクシス表出の方法は主動詞かそれ以外かでグループ間に違いが見られたが、さらに主動詞におけるダイクシス表出の方法にも差が見られそうである。主動詞でのダイクシス表出は二つのパターンがあり、一つは単独動詞（行く／来る）の使用、もう一つは他の移動事象概念を前項に、「ていく／てくる」の補助動詞を後項にとる複雑述語（入っていく／歩いてくる）の使用である。主動詞の中でダイクシスがどのように表されるのか、その比率を見たものが図4である。ただし、そもそも日本語母語話者と学習者とは主動詞におけるダイクシスの使用率に差があることに留意されたい。

図4は、主動詞でダイクシスを表す際の形式・意味タイプ別の割合を表している。Dは単独でダイクシスを表す本動詞（行く／来る）使用であり、その他は複雑述語の形式をとっているものである。PDは「入っていく」のように、前項に経路、後項にダイクシスの動詞を組み合わせたもの、MDは「歩いてくる」のように、前項に様態、後項にダイクシスの動詞を組み合わせたものとなっている。MPDは「走ってのぼっていった」のよ

うに、様態と経路とダイクシスを組み合わせたものである。DM は「\*来て歩いた」のような、学習者に見られた誤用の組み合わせである。

図4 主動詞におけるダイクシス表示の組み合わせ

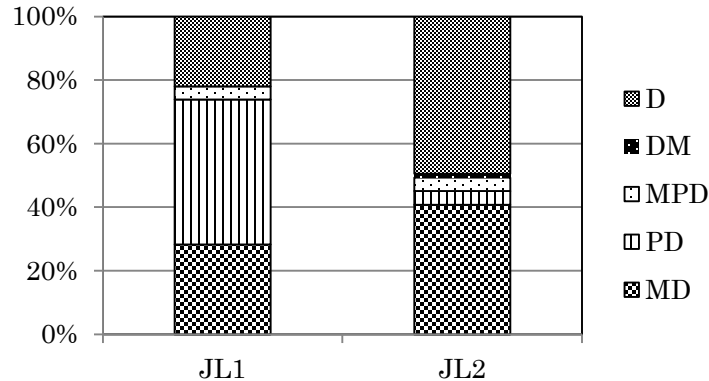


図4を見ると、日本語母語話者と学習者とでは、主動詞におけるダイクシスの表し方に大きな違いがあることがわかる。まず一つは、日本語学習者は単独動詞の使用が多い(43.5%)が、日本語母語話者は複雑述語でダイクシスを表していることが多く(PD: 45.6%、MD: 28.2%)、MPD(4.2%)も含めると、80%を占めることである。この差を見ると、日本語らしいダイクシス表出の方法とは複雑述語の形式使用だと考えられる。複雑述語の形式を用いれば主動詞以外で経路や様態の概念を表すこともできる。学習者にはその方法が定着していないため、図1でみたように、経路や様態の出現平均値が日本語母語話者よりも低くなっているのかもしれない。また、複雑述語を用いずに様態や経路を表そうとすれば、図3のようにそれらを主動詞で表すことが多くなり、ダイクシスを主動詞以外の形式で表そうとしている可能性も考えられる。これは「\*私に歩いた」のような誤用を生むことにもなるため、教育の現場において、複雑述語の使用・定着に取り組むべきだと言えよう。日本語らしい表現を考えることは、誤用にもつながりかねない言語表現について考えることでもある。

もう一つの大きな違いは、複雑述語での移動事象概念の組み合わせである。そもそも複雑述語の使用頻度に差があるのだが、前項に様態、後項にダイクシスをとる複雑述語は、JL1 は 28.2%、JL2 は 40.7%となっている。一方、前項を経路、後項をダイクシスとする複雑述語使用は、JL1 は 45.6 %なのに対し、JL2 は 4.3%と、ほとんどないことが明らかになった。なぜ学習者は経路とダイクシスを組み合わせた複雑述語を用いていないのだろうか。なぜ様態とダイクシスの組み合わせは使用率が高いのだろうか。

詳しい考察は今後の課題としたいが、考えられる要因の一つに、複雑述語の統語的な側面があげられる。「歩いていく」のような様態+ダイクシスの複雑述語は、「いく」という主動詞を前項の「歩いて」が副詞的に限定・修飾する形となっており（寺村 1984）、主要な動詞として「行く／来る」がとらえやすく、主動詞の付随的要素として「て形」の形で様態を主動詞の近くにおくという構造が作りやすいのではないだろうか。教育的な面も考えると、この形態は初級で学ぶ「自転車で行く」「電車で行く」と同じ機能を有しているので、言語産出しやすいものになっているのかもしれない。日本語教育の現場で複雑述語についてどのように扱っているのかも調査する必要があるだろう。

詳しい考察を今後の課題とするのは、検証対象の少なさにも関連する。本実験では三つの経路、三つの様態しか取り上げていない上に、収集した学習者データでは様態 Skip がほとんど言語化されていない。経路 Into の表出に「入る」の使用があまり見られなかったこともある。検証が不十分なため、様態、経路について一般化して述べることは難しい。今後の課題として様々な様態、経路の種類を取り上げて検証、考察を行っていききたい。

#### 4.3 まとめ

日本語母語話者と学習者の日本語における移動表現でのダイクシスの表出に注目して分析を行った結果、ダイクシスの表出頻度は母語話者のほう

が多いとはいえ、経路、様態も含めた移動事象概念の表出傾向を見ると、学習者も日本語母語話者と同様の傾向で移動事象を表出していることがわかった。学習者の母語である中国語とは異なる傾向であることから、日本語としての移動概念表出の傾向が習得できているとも考えられる。

しかし、両者ではダイクシス表出の方法が大きく異なり、日本語母語話者はダイクシスをほとんど主動詞で表すが、学習者は主動詞で表す割合は高いものの、「私のほうに」のような、主動詞以外の方法でダイクシスを表す傾向が見られた。また、主動詞での表し方も、日本語母語話者は補助動詞「ていく／てくる」を用いた複雑述語を用いてダイクシスを表すが、日本語学習者は単独主動詞「行く／来る」で表すことがわかった。学習者の母語である中国語でも複雑述語のように動詞を連続して表す手段があるにも関わらず、単独でしかダイクシス動詞を使用できていないということは、単純に学習者にとって様々な移動概念を表出することが難しくできなかったのか、あるいは、前項の動詞を「て形」という形に変換させることに困難があったのか、理由は定かではない。また、学習者が複雑述語を使用したとしても、「入ってきた」のように、前項で経路を、後項でダイクシスを表す形式を用いることがほとんどないこともわかった。それはなぜなのかを説明することは今後の大きな課題である。

## 5. おわりに

本研究では、日本語らしい表現とは何かを明らかにするため、実験的手法を用いて、事象を描写する際の日本語母語話者と学習者の表現の違いを取り上げて検証を行う方法を提示した。分析対象としたのは学習者の誤用ではなく、言語使用の傾向である。表現傾向を比較することによって、文法的に間違っていないが、何となく母語話者の内省とは異なる表現結果を明示することで、日本語らしさの一端を指摘することができたのではないだろうか。



ただし、なぜ日本語母語話者に共通した言語表現の使用傾向が現れるのか、その動機や要因の考察までには至っていない。先行研究には、主観的に出来事をとらえる日本語母語話者の事態把握の傾向が日本語らしい言語表現に反映されていると分析しているものがある（近藤・姫野 2012）。移動事象に関わる表現、特に「行く／来る」には話し手の事態把握が大きく関わっている。本実験結果が示したように、日本語では話し手を基準とした方向（ダイクシス）を明示する傾向があり、それは話し手が主観的に事態を把握していることを意味している。このような認知言語学の知見も考慮し、さらに様々な場面での日本語母語話者と学習者の表現の違いに注目した検証を重ね、日本語らしさとは何かを考えていきたい。

## 注

- \* 本稿は 2013 年 8 月 15 日 CAJLE2013（カナダ日本語教育振興会年次大会）にて行った口頭発表「日本語学習者の移動表現」の内容に新たな分析や考察を加えたものである。論文の執筆にあたり、査読者から有益なコメントをいただいた。ここに記して謝意を表したい。なお、本研究の一部は JSPS 科研費 25580089 の助成を受けている。
- 1. 「走って入っていった」のような複雑述語の場合、どの部分を主動詞とするかは意見が分かれるところであるが、本研究では右側主要部の原則にのっとり、最終動詞を主動詞としている。
- 2. ダイクシスを表す動詞が他の動詞に対して独自のスロットを持つ韓国語の例や、ダイクシス専用の接頭辞のスロットを持つドイツ語の例などをあげて説明している。
- 3. 複雑述語（complex predicate）とは、「1つの動詞に接辞や別の動詞をつけて新たな動詞を作り、複雑な出来事や行為を表現するもの」（影山 2001: 272）をいう。
- 4. 日本語では複雑述語の前項は「て形」に活用されるが、中国語の場合そのような活用はない。また、このような動詞を連続して表す場合、どの部分を主動詞とするかは研究者によって主張が異なるため、本研究では「ていく／てくる」の日本語の補助動詞と同様に、中国語でも動詞連続の形でダイクシスを表すことができる事実だけを参照する。
- 5. 全員が同大学の中級レベルに位置づけられる日本語授業（筆者担当）の受講経験があり、その成績からも、会話能力を含めた総合的な日本語力においても同程度であると判断できる。
- 6. /TO/のように、//で示す際は、当該概念を含む場面を意味する。

7. 中国語データは「空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究」プロジェクトにおける中国語担当者（小嶋美由紀）によるものである。最終的には中国語担当者によって総合的に論じられる予定である。

## 参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 岡本真一郎（2000）『言語表現の状況的使い分けに関する社会心理学的研究』風間書房
- 荻原孝恵（2010）「日本語学習者のための「から」の語用論 ―接続助詞「から」と「ので」の適切な使用のために―」『日本語 OPI 研究会 20 周年記念論文集・報告書』132-147
- お茶の水女子大学日本言語文化学会編（2002）『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』28-44 凡人社
- 影山太郎編（2001）『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 柏崎秀子（1993）「話しかけ行動の談話分析 ―依頼・要求表現の実際を中心に―」『日本語教育』79, 53-63
- 熊取谷哲夫（1993）「発話行為対照研究のための統合的アプローチ ―日英語の「詫び」を例に―」『日本語教育』79, 26-40
- 小池真理（2000）「日本語母語話者が失礼と感じるのは学習者のどんな発話か：「依頼」の場面における母語話者の発話と比較して」『北海道大学留学生センター紀要』4, 58-80
- 高建斌・小高知宏・小倉久和（2001）「外国人日本語学習者による日本語作文の n-gram モデルを用いた特徴抽出と作文評価」『福井大学工学部研究報告』49-2, 217-225

- 近藤安月子・姫野伴子・足立さゆり (2009) 「中国語母語日本語学習者の事態把握 ー日中対照予備調査の結果からー」『日本認知言語学会論文集』9, 1-11
- 近藤安月子・姫野伴子編著 (2012) 『日本語文法の論点 43 ー「日本語らしさ」のナゾが氷解するー』研究社
- 坂本恵・蒲谷宏 (1995) 「「申し出」表現について」『国語学・研究と資料』19, 左 25-35
- 迫田久美子 (1998) 『中間言語研究 ー日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得』溪水社
- 鈴木睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則 (編) 『視点と言語行動』45-76 くろしお出版
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析 ー中国語話者の母語干渉 20 例』スリーエーネットワーク
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 戸田貴子 (2003) 「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』7-2, 70-83
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 (2001) 『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 畑佐一味・畑佐由紀子・百濟正和・清水崇文編 (2012) 『第二言語習得研究と言語教育』くろしお出版
- 松本曜 (to appear) 「移動表現の類型に関する課題」松本曜 (編) 『移動表現の類型論』くろしお出版
- 吉成祐子 (2007) 「『申し出』場面における待遇表現について」南雅彦 (編) 『言語学と日本語教育V』109-122 くろしお出版
- Inagaki, Shunji. (2001). Motion verbs with goal PPs in the L2 acquisition of English and Japanese. *SSLA* 23, 153-170.
- Koga, Hiroaki, Koloskova, Yuki, Mizuno, Makiko, & Aoki, Yoko. (2008). Expressions of spatial motion events in English, German, and Russian: With

- special reference to Japanese. In C. Lamarre, T. Ohori & T. Morita (Eds.), *Typological Studies of the Linguistic Expression of Motion Events. Volume II A Contrastive Study of Japanese, French, English, Russian, German and Chinese: Norwegian Wood*, 13-44. 21<sup>st</sup> Century COE Program Center for Evolutionary Cognitive Sciences at the University of Tokyo.
- Sinha, Chris, & Tania Kuteva. (1995). Distributed spatial semantics. *Nordic Journal of Linguistics* 18, 167-199.
- Slobin, Dan I. (1996). From 'thought and language' to 'thinking of speaking'. In J. Gumperz & S. Levinson (Eds.), *Rethinking Linguistic Relativity*, 70-96. Cambridge: Cambridge University Press.
- Slobin, Dan I. (2000). Verbalized events: A dynamic approach to linguistic relativity and determinism. In S. Niemeier & R. Dirven (Eds.), *Evidence for Linguistic Relativity*, 107-138. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Talmy, Leonard. (1985). Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In T. Shopen (Ed.), *Language Typology and Syntactic Description, Vol.3: Grammatical Categories and the Lexicon*, 57-149. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard. (2000). *Toward a Cognitive Semantics*. Cambridge, MA:MIT Press.